

人 格 3 (418~425)

座長 大村政男・小宮山 要

- 418 鍼治療時の不安——状態不安・特性不安に関する
1 実験(IV) 日本大学 大村 政 男
- 419 状態不安および特性不安に関する研究(5) 因子別特
性不安と事態別状態不安との関係
兵庫医科大学 曾 我 祥 子
- 420 あがり(対人緊張)の研究(1)あがりとSELF EST-
EEM(自尊感情)の関係
鳥取大学 田 中 宏 尚
- 421 中学生による家庭内暴力の背景的要因に関する研
究 科学警察研究所 小宮山 要
- 422 校内暴力非行生徒に関する調査研究
大阪教育大学 藤 田 裕 司
- 423 高校生と樹木画、生徒指導と学習について考
察——全体印象からみた定時制生徒と全日制生
徒の比較—— 寝屋川高校 横 山 基 弘
- 424 投影法を用いた価値観測定の試み——作話反
応と項目評定の関連 名古屋大学 宗 方 比佐子
- 425 中学生の達成動機と社会的逸脱傾向の研究
東邦大学 黒 岩 誠

418(大村) 曾我祥子(兵庫医科大)からの質問: S T A I の被験者に不安テストであるという実験の目的を伝えた意図はどうか。回答: 実験はよい被験者を得ることによってよい成果を収めることができるのだと思う。心理学実験では実験者の示唆や暗示によって被験者がよい結果を捻出していることもある。このような事態に陥るくらいなら実験の意図を明らかにして協力してもらったほうがよいと考える。

419(曾我) 大村政男(日大)からの質問: 仮説的な不安喚起事態を使っているが、このような事態設定に無理はないか。回答: 事態設定にイメージを用いた理由の1はまず手続的に非常に容易であること、2は従来の研究でイメージを利用した場合も状態不安が上昇すること、すなわち、それがストレスとしての役割を果たすことが明らかにされているからである。

420(田中) 稲松信雄(東邦大医学部)からの質問: 対人緊張の強い人は概して自尊感情点が低いといっているが、また逆も真か。回答: 自尊感情点(SE得点)の高い人の中にも対人緊張の強い人、すなわち、あがりやすい人があることは事実である。黒岩誠(東邦大医学部)からの質問: 論文集 p. 405 の表2のうち「少しあがる×どうしようもない」の欄の度数が他と違ってアン

バランスだが。回答: このアンバランスは質的よりも単に量的なものと考えている。

421(小宮山) 秋葉英則(大阪教育大)からの質問: 暴力行為を青年期の発達の危機の反映と考えられないか、暴力行為発生の本質的要因は、暴力の意味をどう考えるか。回答: 1. 青年期の暴力は発達課題の不履行を中心とする発達障害の反映と考えられる。2. 外的要因としては進学指向知識偏重の学校教育からの落ちこぼれ問題、内的要因としては自我確立不全の問題をあげることができる。3. 親や教師がどれだけ真剣に自分に対応してくれるか——という1つの試みとして暴力をふるう場合が多い。親や教師の“中学生の内的世界の認知”に変化が見られたときに暴力は漸次鎮静していく。宮沢秀次(名古屋経済大)からの質問: 父・母それぞれに対する男子の暴力欲求は違うのか、その意味をどう考えているか、また女子の暴力欲求についてはどうか。回答: 父・母に対する暴力欲求の背景はかなり異なっている。学校不適応・否定的自己認知・自我拡散などの領域にのみ男女共通の傾向が現われている。母親に対する暴力欲求はすべての領域において高い値を示している。男子は女子よりも著しいが、この事実は家庭内暴力の発生が女子より男子に多いという事実と一致し、心理的距離の近いことを示している。宮沢秀次からの質問: 暴力群と非暴力群の人数について。回答: 母親に対する暴力群は男子69人、女子61人。非暴力群は男子556人、女子524人。父親に対する暴力群は男子78人、女子64人。非暴力群は男子585人、女子569人である。なお、母親に対する暴力群のうち父親にも暴力をふるうものは48.5%、父親に対する暴力群のうち母親にも暴力をふるうものは42.3%である。

422(藤田) 秋葉英則からの質問: 家庭内暴力と校内暴力との間の類似性と異質性について、また器物破損が前段階としてあるか。回答: 依存対象に対する攻撃性という心理機制において両者に共通点が見られる。器物破損の段階の有無については資料がない。

423(横山) 藤田裕司からの質問: 定時制生徒の樹木画に黒さが目立つか。回答: 非行少年の樹木画にはそれが見られるが、ここでは決め手がない。

425(黒岩) 秋葉英則からの質問: 逸脱行為の予測にのみ研究の視点が向けられている。回答: 達成動機の評価から社会的逸脱をすべて説明することはできないが、その評価から教育現場での接近はできる。

このセクションは家庭内・校内暴力を中心に活発なディスカッションがおこなわれた。(大村・小宮山)